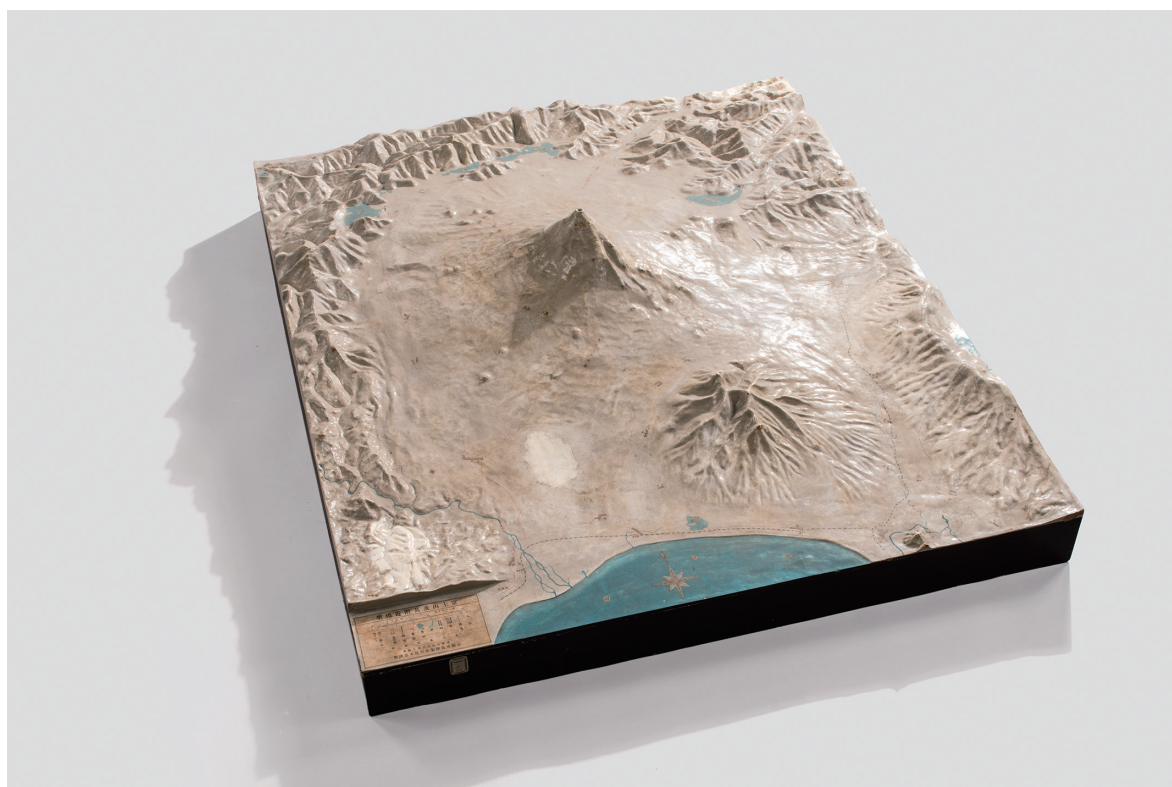


November 2017

京都大学総合博物館 ニュースレター



富士山及其附近模型 (2頁に関連記事)

平成 29 年度秋季企画展「大地の形をつかむ：方法としての三次元」.....	2
大学博物館シンポジウム「コレクション、博物館科学、国際ネットワーク」.....	3
第 7 回アジア脊椎動物種多様性研究セミナー	3
平成 29 年度特別展「火焰型土器と西の縄文」.....	4
ワークショップ「考古学者の弟子」講座	5
ロビー展示「願いをこめたわたしの土偶」.....	5
夏休み学習教室「体験 EXPO 2017' 夏」.....	6
プログラム No. 1 深海魚カードで挑戦！アーキビストの仕事	
プログラム No. 3 黄鉄鉱を掘り出そう！結晶のふしぎな形	
総合博物館コレクション研究〈1〉：平瀬貝類標本	8
3 枚の写真で語る「高校生のための先端研究レクチャー」.....	10
招へい外国人学者	10
研究資源アーカイブ通信〈11〉（平成 28 年 4 月～平成 29 年 9 月）.....	11
総合博物館日誌（平成 29 年 7 月～10 月）.....	12

平成29年度秋季企画展

大地の形をつかむ：方法としての三次元

開催期間：平成29年11月1日(水)～12月17日(日)

総合博物館の地理部門には、地形模型など、立体として地表面や景観を表現する資料や、測量器具が収蔵されている。これらは、京都大学の100年を超える歴史の中で、地形の起伏をとらえるための教材として、地理教育において重要な役割を果たしてきた。

この企画展では、これらの資料を紹介することで、視野や視点の限られた人間が、地球、大地、そして自らの位置を、三次元のものとしてどのようにとらえてきたのか、その工夫の跡をたどった。以下では主な展示品を紹介しつつ、地理学が人文社会科学のみならず、自然科学の素養をも必要とする「総合」の科学であることを見ていきたい。

1. 球体である地球

地図は球体としての地球を平面に置き換えたものであるため、形、距離、面積、方位をすべて正しく表現することができない。これに対して、立体として地球を再現した地球儀は上記の条件をすべて満足させることができるため、地球上の任意の2地点間の距離、方位、経路などを測定することができる。

2. 立体を測量する

空を飛ぶことができなかった時代には人間の視界が限られていたため、地表面の状況を広域に把握するために様々な工夫が行われた。こうした工夫を体



プリズムコンパス

系化したものを測量という。ここに示したプリズムコンパスは、地図の定位を行うのに用いられる測量器具である。一方でプリズムを通して羅針盤（方位磁針）を確認しつつ、他方で視準板に張られた馬の毛を照準ラインとして目標物をとらえる。これにより自身の位置から見た目標物の方位角が精密に確認できる。光軸にはフィルターが入っており太陽を見ることもできる。

3. 地形模型から見る地形・地質

地形図から鉄道、道路、建築物などの地物は比較的容

易に把握できるが、等高線の分布状況から尾根、谷、台地、低地といった地形を読み解くには慣れが必要になる。また、現地観察を試みても、急な斜面や部分的凹凸は認めることはできるが、大規模な地形の場合は全体を把握することに困難が付きまとう。

地形模型を用いれば、実際の地形の現況や経時的变化を立体的にとらえることが可能になる。特に侵食の激しい地形など、複雑な地形の把握には地形模型が有効で、地形の大

阿蘇山地形模型
(農商務省地質調査所作成)

規模な変化や内部の微地形も容易に理解することができるようになる。ここに示したのは農商務省地質調査所で作製され、日英博覧会に出品された阿蘇山の地形模型である。博覧会終了の翌年（1911年）1月、京都帝国大学文科大学の地理学教室で買い入れられており、かつて地質調査所に勤務していた小川琢治教授によって購入されたものと考えられる。

4. 地形図と地形模型

地形図から等高線を一本一本切り抜いて重ねていく作業によって、地形図を眺めているだけでは理解できない斜面の傾斜や傾斜の変換点などをより詳しく



京都盆地地形模型

く把握することが可能になる。地形が複雑になっている部分では等高線のつながりを正確に確認することで、崖や凹地になっている部分の理解も進む。

ここに示したのは、過去に京都大学の学生が作成した京都盆地の地形模型である。地形図の図郭に対応して、4分割されている。東西の断層崖が明瞭に現れており、京都の地形が変動性の盆地であることを一目で確認できる。

(佛敎大学歴史学部 講師 網島 聖)

大学博物館シンポジウム

コレクション, 博物館科学, 国際ネットワーク

総合博物館では、7月2日（日）午後に大学博物館シンポジウム「コレクション, 博物館科学, 国際ネットワーク」(Symposium on University Museums: Collection, Museum Science, and International Network)を開催しました。これは、企画展「標本からみる京都大学動物学のはじまり」の関連イベントとして、総合博物館の20周年にあたり、大学博物館のこれからを展望するために企画されたもので、英語で行われました。総合博物館では大学博物館が学術において分野横断的に果たす役割や可能性について考えてきました。大学博物館をめぐる現状を共有し、これまでの議論をさらに深めるとともに、大学博物館の将来への展望を描くことをシンポジウムで目指しました。ドレクセル大学のポール・カロモン氏、スロベニア自然史博物館のボリス・クリストフェク氏、ラオス国立大学のダオサバン・サナムサイ氏、総合博物館の中山直英特定期助教、へ・カイ外国人特別研究員、本川（筆者）より話題提供が行われました。参加者を交えた討論では、標本の重要性和その利用、標本のデータベース化、博物館科学に関わる次世代人材の育成、国際ネットワークの重要性など幅広いテーマが取り上げられ、総合博物館の今後の活動を進める上で有意義な議論の場となりました。

（総合博物館 教授 本川雅治）



登壇者：(左列上から) ポール・カロモン, ボリス・クリストフェク, ダオサバン・サナムサイ, (右列) 中山直英, へ・カイ, 本川雅治

第7回アジア脊椎動物種多様性研究セミナー

2017年9月7日に、総合博物館が推進する日本学術振興会研究拠点形成事業「第7回アジア脊椎動物種多様性研究セミナー (JSPS Core-to-Core Program: 7th Seminar on Asian Vertebrate Species Diversity Research)」が京都大学北部キャンパスにて開催されました。このセミナーはアジアの脊椎動物種多様性研究における研究者・標本・情報の一体型ネットワーク拠点を形成する一環として行われています。参加者は主に分類学、系統地理学、形態計測学、行動学を専門とする学生・若手研究者で、彼らが発表する研究成果に基づいて議論が展開しました。今回は日本、中国、ベトナム、タイ、ミャンマー、ラオスのアジア6カ国から参加した10名の研究者や学生が研究発表を行い、意見交換が行われました。

セミナーは総合博物館の本川雅治教授による開会の辞により始まり、各演者からアジア地域の脊椎動物を対象とした最新の研究成果が紹介されました。その内容はベ

トナム産魚類の種構成・分類, オオサンショウウオ属両生類の攻撃行動比較, 日本産両生爬虫類の系統地理, ミャンマー産カエル類の分類学, 中国産齧歯類の比較系統地理, タイ産マカク属サル類の社会行動, 日本産齧歯類の形態解析, ラオス産ムササビ類の形態学など多岐にわたり、アジア地域における生物多様性の理解や課題について活発な議論が交わされました。

（理学研究科 博士課程1年 牧野智久）



セミナーの参加者

平成29年度特別展 火焰型土器と西の縄文

開催期間：平成29年9月9日(土)～10月22日(日)

燃えさかる炎を表現したかのように見える縄文土器。それが、火焰型土器である。縄文土器の代名詞として、写真が歴史教科書に掲載されることが多いから、縄文遺跡であれば、どこでも出土するように誤解されることがあるが、火焰型土器が出土するのは、現在の新潟県域、その中でも特に集中するのは信濃川流域であり、1万年をこえる長い縄文時代のなかでも、中期中葉という時期の数百年間に限られている。

昨年度、この火焰型土器を構成文化財とする「なんだ、これは！」信濃川流域の火焰型土器と雪国の文化」が文化庁の日本遺産に認定された。火焰型土器を出土する信濃川流域の市町村が信濃川火焰街道連携協議会(新潟市・三条市・長岡市・十日町市・魚沼市・津南町)を発足させ、火焰型土器とその地域の縄文文化の魅力を発信してきた成果である。本特別展は、日本遺産認定を記念し、関西の皆さんにも、火焰型土器を中心に縄文文化の多様性を知っていただくために、平成29年度文化芸術振興費補

助金(日本遺産魅力発信推進事業)を得て、企画したものである。

展示は二部構成をとった。第1部は、国宝・重要文化財を含む火焰型土器とその時代の精神性を示す土偶や三角形土版、石棒、硬玉大珠などを展示した。火焰型土器が煮炊きに使われたことを示すとともに、なにが煮炊きされたのか、最新の理化学的な分析も提示した。これほどの優品が一堂に列品されることはない、と新潟県関係者が言われるほどの列品構成であり、見学者が、息をのむように火焰型土器に見入っている姿が印象的であった。

第2部は、火焰型土器と同時代のほかの地域の土器、火焰型土器のデザインの西への影響、京都大学の縄文研究を紹介するべく、総合博物館、文学研究科考古学研究室、文化財総合研究センターが所蔵する資料で展示を構成した。1400点あまりの展示品は、今まで展覧されることのほとんどなかった資料であり、京都大学が縄文研究に戦前から現在にいたるまで重要な役割を果たしてきたことを示すことができた。

会期初日には、オープニング・セレモニーとして、特別対談、ミュージアム・トーク、縄文コンサートを開催した。百周年時計台記念館国際交流ホールでおこなった特別対談は、200名収容の会場が満席となり、小林達雄國學院大学名誉教授と泉拓良京都大学総合生存学館特定教授の火焰型土器をめぐる議論に聞き入った。そのあと、おこなわれたミュージアム・トークでは、解説のあとの質問が途絶えることなく、また斎藤孝太郎さんによる縄文コンサートでは、縄文と現代音楽・映像の融合に、各人それぞれが縄文のイメージを膨らませているようであった。

この特別展の開催が正式に決定したのは、本年4月5日のことである。それから5ヶ月という短期間で、国宝・重文を含む展示準備を成し遂げることができたのは、企画実行委員およびそれを支えた皆様の献身的な努力があったからにほかならない。その点を銘記させていただくとともに、火焰型土器の魅力を京都で発信できたことはもちろんのこと、京都大学が所蔵する縄文資料の学術的意義を知っていただく機会を得られたことは、私にとって大きな喜びであった。

(文化財総合研究センター 准教授 千葉 豊)



特別対談風景



ミュージアム・トーク(解説：佐藤雅一氏)

ワークショップ「考古学者の弟子」講座

9月からはじまった火焰土器特別展に併設して「考古学者の弟子」講座を実施した。3回シリーズで、第1回「つくってみる」が9月16日（土）に開催された。参加者25名（付き添いの保護者を含め43名）が集まり、滋賀県立琵琶湖博物館の妹尾学芸員より縄文土器の文様がどのようにつけられているのか、実際に粘土に縄文をつけながら教わるワークショップである。縄を押し付けたり、撚り糸棒を転がしたり、あるいは竹管で押し引いたりと様々な模様の付け方を習い、実際に粘土に思い思いの文様を付けた。その後、妹尾先生に引率されて国宝の火焰土器を含む特別展を見学した。「あっ、これ押し引きだ」「こんなに細かい模様、何回やったんだろう」と自分たちで模様の付け方を学んだことで、着眼点がより具体的

になり、引き込まれるように縄文土器を観察している参加者がたくさんいた。さらにワークショップ会場に戻り、火焰土器の魅力的なデザインに感化されたのか、ついには火焰土器状の作品を作る参加者もあらわれた。第2回は、富井真先生（京都大学文化財総合研究センター）をお迎えして、縄文中期中葉の日本各地の土器破片を「くらべてみる」中級編。第3回は泉拓良先生（京都大学総合生存学館）をお迎えして、火焰型土器と王冠型土器の成立の差異について「かんがえてみる」上級編、をそれぞれ実施した。短時間に一気に考古学者の視点に近づく学びの仕掛けをふんだんに組み入れた贅沢なワークショップとなったと確信している。

（総合博物館 准教授 塩瀬隆之）



粘土に様々な模様つけ体験をする参加者



模様のつけ方が分かったことで食い入るように観察する参加者

ロビー展示／開催期間：平成29年9月6日（水）～10月22日（日）

願いをこめたわたしの土偶

8月におこなった夏休み子ども学習教室「縄文時代にワープして一人ひとりが自分の『願いをこめた土偶』を作ろう!」では、小中学生と保護者が紙粘土をつかって土偶の制作に取り組んだ（6頁参照）。「せかいが平和になるように（小4）」「パン屋になりたい（小4）」「縄文人のように、やさしくて思いやりのある人になれますように（小5）」「自分の世界が広がりますように（中1）」など、現代の私たちがもつ願いのこもった土偶で、いずれも力作ぞろいである。

特別展「火焰型土器と西の縄文」会期にあわせて、これらの作品を総合博物館ロビーで展示した。2階の特別展示室には、火焰型土器とともに、約5,000年前に縄文時代の人びとが作った土偶も展示されている。特別展示室と、真下に位置するロビーとを行き来して、縄文と平成の土偶を比較しながら、縄文人をすこし身近に感じてもらう機会となった。

子ども学習教室と本ロビー展の企画と実施にあたっては、これまでも子どもたちと土偶を制作する活動を進めてきた子ども縄文の会、山口美佐子先生にご参加いただいた。記して御礼申し上げます。

（総合博物館 准教授 村上由美子）



ロビー展示の様子

夏休み学習教室「体験EXPO 2017' 夏」

開催期間：平成 29 年 8 月 2 日（水）～ 4 日（金）

2017 年 8 月 2 日（水）から 4 日（金）にかけ、小中学生を対象とした「夏休み学習教室『体験 EXPO 2017' 夏』」を開催しました。今年で 17 回目となる「体験 EXPO」は、総合博物館が毎年催している夏休み恒例のイベントです。館内外の専門家を講師として迎え、子供たちに「学ぶ楽しさ」や「分かる喜び」を伝えたいと考えています。今年は「土偶」、「能」、「アーカイブ」、「鉱物」に関するプログラムを新たにに加え、計 7 つのプログラムを実施しました（タイトルは巻末の「総合博物館日誌」をご覧ください）。3 日間でのべ 138 名の小中学生が参加し、毎日期待以上の盛り上がりを見せました。

カードゲームを使った「元素博士ジュニアになろう！」は毎年好評のプログラムです。ゲームの監修者である桜井弘先生（京都薬科大学名誉教授・元素周期表同好会）が元素周期表を楽しく教えてくださいました。一方、新プログラムの「縄文時代にワープして一人ひとりが自分の『願いをこめた土偶』を作ろう！」では、子供たちが

粘度を使って個性豊かな土偶を作りあげました。彼らの力作は企画展「火焰型土器と西の縄文」の会期（9 月 9 日～ 10 月 22 日）に合わせ、総合博物館のロビーで一般公開されました。総合博物館からは助教の白勢（専門は鉱物学）、特定助教の齋藤（アーカイブズ学）・中山（魚類学）が各自の専門分野に関連したプログラムを提供しました（次ページをご覧ください）。

小中学生にとって、大学での教育研究活動は少し遠い存在かも知れません。「体験 EXPO」はこのような距離を縮めてくれる大学博物館ならではの企画ではないでしょうか。ちなみに、総合博物館では毎週土曜日に「京都大学子ども博物館」を開催しています。今年の「体験 EXPO」の企画運営に携わる中で、このようなアウトリーチ活動を通して「京都大学」と未来を担う子供たちとの距離が縮まっていることを再認識しました。

（総合博物館 特定助教 中山直英）



毎年好評の「元素博士ジュニアになろう！」



大盛況だった「トカゲとヘビはどこがちがう？」



完成後ロビーで展示された「願いをこめた土偶」



「深海魚カードで挑戦! アーキビストの仕事」で生息域に注目したチーム

「体験 EXPO 2017 夏」プログラム No. 1

深海魚カードで挑戦！アーキビストの仕事

アーカイブズをテーマにワークショップを企画してほしい。そんな相談を春先にうけて、困った。アーカイブズ機関のワークショップといえば史料を使った歴史教育だが、私は歴史学の専門ではない。そのうえ京都大学研究資源アーカイブは、資料の整理・デジタル化・利用促進をミッションとしており、資料そのものの寄贈や寄託は基本的には受け付けていない。そのため、今回のような事業で自由に使える資料はない。そもそも、私にワークショップ講師の経験がない。そんな三重苦ともいえる状態で、それでも取り組む決意をしたのは、日本のアーカイブズを取り巻く状況を鑑みてのことだ。

アーカイブズ機関の役割やアーキビストの職能について、社会的認知が不十分だと現状を憂う専門家は多い。こうした状況を打開するには個人の力はあまりに乏しく、日頃の業務や研究をつうじて社会に訴えるにも限界がある。しかし、アーカイブズの周知には初等教育こそ有効ではないかという個人的なアイデアは以前からあった。小学校の図書館で児童は、利用者を経験し、ときに

図書委員として運営側にも立つ。いわば図書館を理解するプログラムが自然なかたちで存在する。どうかこの仕組みを応用できないものか——。このところ公文書は〈事件〉として報道されるが、もっとポジティブにアーカイブズが理解されてもよい。そんな気持ちもあった。

悩んだ末に、同僚の中山助教を巻き込んで「深海魚カードで挑戦！アーキビストの仕事」を企画した。アーカイブズ資料に見立てた深海魚カードで、参加者にアーキビストの業務のうち「編成 arrangement」を追体験してもらう試みである。結果、中学生チームは、生息地に注目して太平洋と日本海をさらに南北にわけて、四つの海域の「編成」から深海魚の特徴をとらえた^[6頁(右下)]。

手製のカードが参加者を魅了し、あっという間の二時間を過ごした。魚類学とアーカイブズ学の協同は、総合博物館らしい企画とも思う。今後は、アーカイブズ機関におけるアウトリーチ活動の分析事例を参考に今回の試みを位置づけて、自己評価を試みたい。

(総合博物館 特定助教 齋藤 歩)

「体験 EXPO 2017 夏」プログラム No. 3

黄鉄鉱を掘り出そう！結晶のふしぎな形

8月2日から4日に総合博物館で開催された「夏休み学習教室」では、「黄鉄鉱を掘り出そう！～結晶のふしぎな形～」といったタイトルのプログラムを開催しました。このプログラムは、高田クリスタルミュージアムの高田雅介館長と共に行ったもので、二人で試行錯誤を重ねた末にたどり着いたものです。20名の定員に対して数倍の数の応募があり、石に興味を持つ小学生、中学生が多いことに驚くと共に今後もこのようなイベントを定期的に開催できたらと感じた次第です。内容は、はじめに鉱物のお話しをしたあとに、実際に粘土の塊の中から、黄鉄鉱などの美しく規則性を持った結晶を、水に粘土を溶かしながら掘り出しました。実はこの粘土の塊は産地から採取したままの状態、セリサイトなどの粘土鉱物が水に溶けやすい性質を利用したものです。皆、金属の輝きを放つ立方体や正八面体などの規則正しい結晶を自らの手で見つけ出すことに夢中になっていました。次に、掘り出した黄鉄鉱と同じ形の結晶模型を紙で作りました。この結晶模型の型紙は、結晶図を描かせたら日

本一と言っても過言ではない高田先生自ら描かれたもので、その緻密さに私も感嘆しました。後日参加者の子から鉱物が好きになったと感想を聞いてとても嬉しかったです。綺麗な鉱物を見つけ出す楽しみ、自然の中に潜む幾何学的な美しさ、これらの経験をもとに自ら自然の中で学ぶ楽しみを身に付けてもらえたらと思いました。

(総合博物館 助教 白勢洋平)



黄鉄鉱を探す参加者

総合博物館コレクション研究〈1〉 平瀬貝類標本

平瀬與一郎（安政6年～大正14年）^{〔図1〕}は淡路島南部出身の商人である。1887（明治20）年に京都に移り、御所の蛤御門前に新居を構えた。彼は同志社大学の生物学・進化論の教授 M. R. ゲーンズ（M. R. Gaines）と J. T. ギュリック（J. T. Gulick）の指導の下、貝の収集を開始した。自宅の一部を「平瀬介館」という展示室に変え、国内外の貝類コレクター標本の交換を行う一方、助手達を貝の収集のために、千島・小笠原・台湾・韓国・中国といった遠方へと送り出した。

明治34年、平瀬は同じ淡路出身の15歳の少年、黒田徳米（明治19年～昭和62年）^{〔図2〕}を家僕として雇った。黒田はすぐに貝に興味を示し、平瀬から標本の作製法や簿記などを教わり、明治40年からは当時岡崎公園前にあった平瀬貝類博物館の経営担当として、企画に携わった。黒田は1921（大正10）年に京都大学（当時の京都帝国大学）の理学部に助手として就職したのち、貝についての多くの論文と著書を残し、日本有数の貝類学者として名を馳せた。また、日本貝類学会の創立者でもあり、生涯にわたって貝類研究の発展に貢献した。

黒田は自然科学と関連する社会構造に携わった人物でもある。第二次大戦後、彼は多くの学者とコレクターからなる巨大な貝類コミュニティの中心人物となっており、弟子の波部忠重と共に GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）に貝類専門家として雇われた。

明治時代に、日本は外国人研究者を雇用することで、科学の社会化の促進を図った。平瀬と黒田が抱いた自然に対する興味を論文等で業績として残すことができたの

は、その成果の一例である。西洋から導入された分類体系に従えば、「学者」ではない人でもすぐ国際動物学の世界に入ることが可能となった。

京都大学総合博物館には、平瀬貝類博物館の標本から構成される三つの貝類コレクション（以下、平瀬コレクション）が所蔵されている。その内容は、それぞれほぼ全種類にわたる日本の海産・陸産・淡水産貝類であるが、ラベルや標本番号の順番は当時のものとは多少異なる。これらのコレクションは京都大学の動物学教室と地質学鉱物学教室、または旧第三高等学校（1950年までに京都大学へ統合）から博物館に移動してきた経緯がある。

また博物館には、平瀬コレクションの一つについて、手書きのリストが残っている。これは、黒田が平瀬貝類博物館から京都大学へ転職する直前の大正10年に作成されたと考えられているが作者は不明である。平瀬は英語についても堪能であり、おそらく京都に移る以前から英語を勉強していたと考えられる。彼は大学関係の知り合い以外にも、寺町通にあった洛陽教会とも繋がりがあり、その中には外国人も多く含まれていた。一方、最終的に「学者」になる黒田は、大正10年ごろから英語が上達していったという証拠があるが、いつ・どのようにして上達したのかは興味深い問題である。

リストの作者を解明する重要な鍵として、二人の筆跡が挙げられる。興味深いことに、黒田の筆跡は平瀬のものによく似ている。また、大正4年頃から、平瀬が書いたとされる外国人への英語の手紙の一部に、筆跡が多少異なるものが見受けられるようになる。このことから、黒田は平瀬の手紙を真似して英語を学んでいたと推測できる。兵庫県西宮市にある西宮市貝類館には、黒田のノートと原稿が残っている^{〔図3 (e-g,k)〕}。総合博物館のリストとラベルを、西宮市貝類館に保存されている黒田の筆跡（つまり、平瀬が亡くなった1925（大正14）年以後のもの）^{〔図3 (f,g)〕}と、黒田を雇う以前の平瀬の手紙（1902〔明治35〕年ごろ）^{〔図3 (a-c)〕}と比較した結果から、総合博物館に収蔵されているコレクションのリストとラベル^{〔図3 (d)〕}はおそらく黒田が作成したものと考えられる。黒田の筆跡は、1930年代頃から識別が容易になるものの、依然として平瀬の影響が垣間見える^{〔図3 (h-k)〕}。

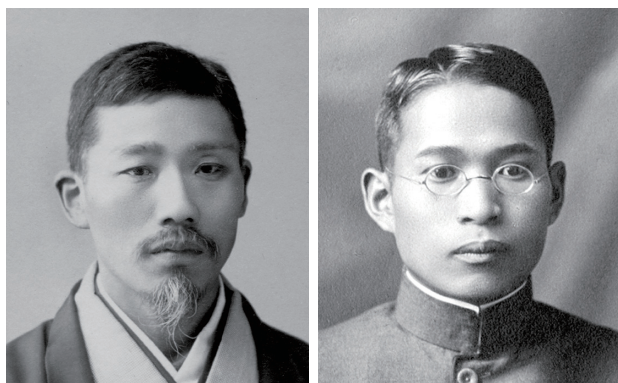


図1（左）：明治39年の平瀬與一郎（米国貝類学会 AMS 蔵）

図2（右）：明治39年の黒田徳米（西宮市貝類館蔵）

以上の覚書は、これから著者が執筆予定である、日本の貝類学史を解明する研究論文の一端を担うものである。従来考えられていた以上に、黒田が平瀬から受けた影響が大きいことは明らかである。大学の助手となった黒田は、ある意味で平瀬の後継者であった。平瀬は分類学をほとんど独学で学んでいたため、二人とも指導教授よりも、むしろ西洋分類体系そのものから学んだと言えるだろう。そして、その秘訣は英語であった。

謝辞：2017年の京都大学での研究の機会を与えてくれた総合博物館・本川雅治教授、有益なコメントをくれた中山直英博士に感謝します。また、西宮市貝類館の高田良二氏、同志社大学の布施智子氏と物部ひろみ氏にも感謝します。

(ドレクセル大学・自然科学アカデミー
コレクションマネージャー ポール・カロモン)

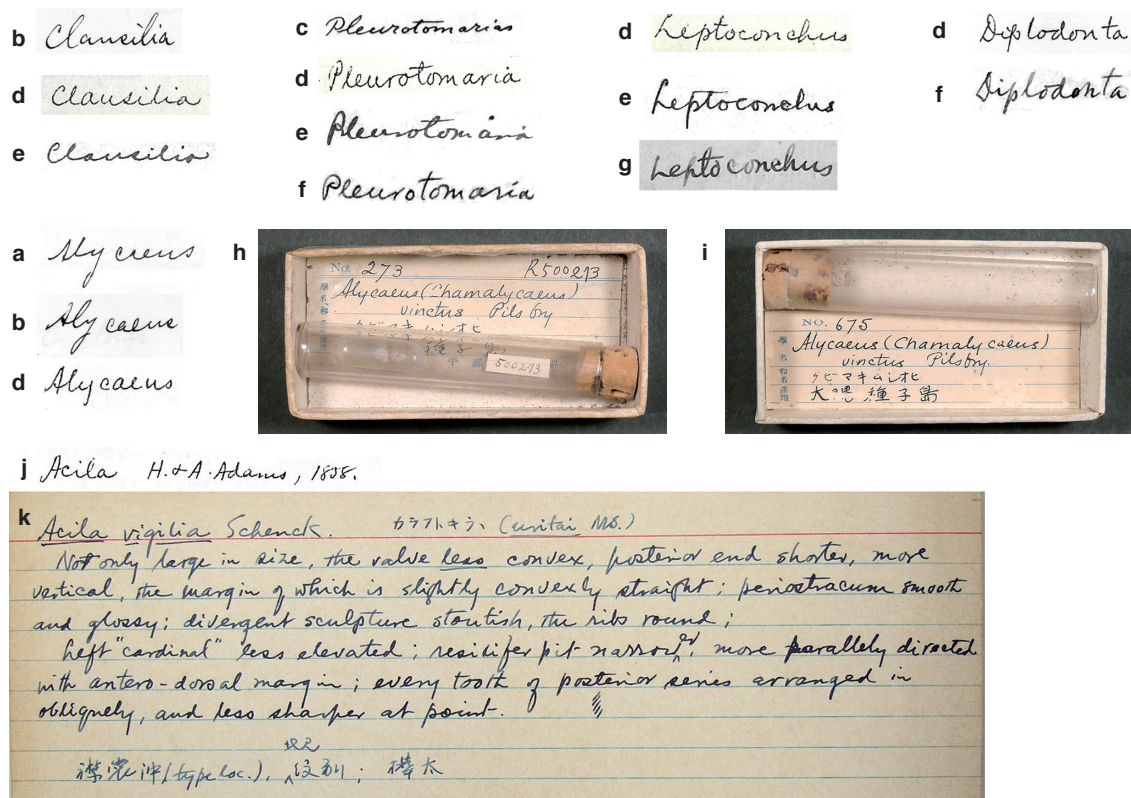


図3：自筆のサンプル

- (a) 明治34年12月20日、平瀬からカーネギー自然史博物館へ宛てられた手紙。平瀬の自筆（カーネギー自然史博物館蔵）
- (b) 明治33年、平瀬からJ. B. ヘンダソンへ宛てられた手紙。平瀬の自筆（スミソニアン自然史博物館蔵）
- (c) 明治36年、平瀬からH. A. ビルズブリーへ宛てられた手紙。平瀬の自筆（フィラデルフィア自然科学アカデミー蔵）
- (d) 大正10年のコレクション・リスト。作成者不明（平瀬、もしくは黒田）（総合博物館蔵）
- (e) ノートに書かれた「千貝目録」。作成者不明（平瀬、もしくは黒田）（西宮市貝類館蔵）
- (f) 昭和25年、黒田の原稿（西宮市貝類館蔵）
- (g) 黒田が使っていた『原色日本貝類図鑑』（昭和9年発行）に書きこまれたメモ（西宮市貝類館蔵）
- (h) 京都大学大学院理学研究科地質学鉱物学教室由来のコレクション（総合博物館蔵）
- (i) 同研究科動物学教室由来のコレクション（総合博物館蔵）
- (j) 平瀬又は黒田に書かれた1921年の日本産貝類目録（総合博物館蔵）
- (k) 昭和11年以降に書かれた黒田の自筆（西宮市貝類館蔵）

3枚の写真で語る「高校生のための先端研究レクチャー」

京都大学の夏の風物詩となったオープンキャンパスの博物館企画の一つとして、8月9日に「高校生のための先端研究レクチャー」を実施した。若手研究者が3枚の写真を元に、自身の高校生時代を振り返りながら、なぜその研究分野を志したのか、受験ではどのような科目選択をしたのか、夢はかなったのか、といった等身大の大学生活、研究者生活を語ってくれた。日本学術振興会特別研究員PDの木下豪太さんは、子どものころに心奪われたミヤマカラスアゲハの写真からスタートし、生物多様性という本質的な問いへの出会いから現在は野ウサギの研究へ自らの興味関心が移っていった経緯を紹介した。総合博物館のへ・カイさんは、ダーウィンの進化論にはじまり、中学生のときに夢見た生物学者への道を着々と歩み、いまは大好きな京都で研究生生活を送っている楽しさを金閣寺の写真を元に語った。農学研究科の齊藤浩明さんは、一見すると動物学研究とは無関係なビールカップの写真から語り始めたが、それが小動物を捕獲する道具だとわかったと高校生たちも大きな関心を寄せていた。

多くの高校生は、5年、10年と、すぐに高校時代を想像できる歳の近い若手研究者が、自らの純粋な興味を貫いて受験を乗り越えた姿に関心を示していた。ミニレクチャーの最後に若手研究者らが執筆した英語論文を配布したところ、直接話を聞いたことのある人の英語なら長文読解の動機も持続するはずと好評であった。

(総合博物館 准教授 塩瀬隆之)



企画展示の動物標本を囲みながら若手研究者の講義を聴く高校生たち

招へい外国人学者

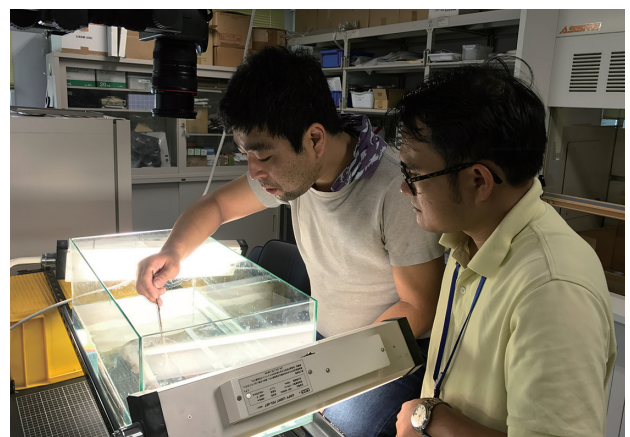
郭美芳 (Kuo Mei-Fang) 平成 29 年 8 月 1 日～ 14 日

グエン・タン・ナム (Nguyen Thanh Nam) 平成 29 年 9 月 6 日～ 20 日

総合博物館は平成 29 年度京都大学総長裁量経費の支援を受け、「標本を基軸にした分野横断型博物館科学の構築と大学博物館国際連携」を進めています。このプロジェクトは学術標本とそれらに基づく教育研究活動を基軸とし、大学博物館にしかできない分野横断型博物館科学の構築を海外の研究機関と連携しながら目指すものです。その一環として、この夏に国立成功大学博物館(台湾)の郭美芳博士とベトナム国家大学ハノイ校生物学博物館のグエン・タン・ナム博士を招へいし、上記の目標に向けた学術交流を行いました。郭博士は8月1日から14日まで京都に滞在し、総合博物館に所蔵されている台湾民族資料コレクションを重点的に調査しました。滞在中の成果は来年度に台湾で開催される京都・大学ミュージアム連携の展覧会で公開される予定です。グエン博士は9月6日から20日にかけて来日し、国内大学の主要な魚類標本コレクションを訪れるとともに、総合博物館のスタッフから標本の維持管理について実践的なトレーニングを受けました。また、日本魚類学会年会(北海道大学)と第7回アジア脊椎動物種多様性研究セミナー(本

学)に参加し、自身の研究発表を通して日本の研究者や学生と活発に交流しました。ちなみに、今回のプロジェクトでは、11月にラオスからも若手研究者を招へいする予定です。一連の招へいが契機となり、総合博物館の学術標本を基軸とした新たな国際展開が始まろうとしています。総合博物館の今後の研究にご期待ください。

(総合博物館 特定助教 中山直英)



魚類標本の写真撮影を行うグエン博士(右)と筆者(左)

研究資源アーカイブ通信<11>

(平成 28 年 4 月～平成 29 年 9 月)

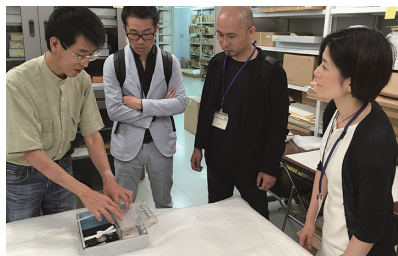
平成 28 年度

2016 年 4 月 28 日：映像ステーションを総合博物館へ移転・リニューアルオープン（京都大学稲森財団記念館から）。

7 月 15 日：『京都大学総合博物館ニュースレター』No. 37 に、「研究資源アーカイブ通信 堀田満映像資料：映画フィルム，1960～ca.1982」掲載。

7 月 19 日：研究資源アーカイブ運営委員会（第 12 回）開催。

8 月 4 日：第 4 回研究資源アーカイブ研究会開催（東京大学文書館 3 名来館）。



9 月 12 日：2017 年度実施分「研究資源化プロジェクト」説明相談会開催。

9 月 14 日：京都大学生態学研究センター（滋賀）にて調査。

9 月 30 日：研究資源化公募の調査依頼受付締め切り（依頼 4 件）。

10 月 26 日：桂キャンパスにて調査。

11 月 21 日：滋賀県立大学にて調査。

11 月 24 日～25 日：京都大学防災研究所地震予知研究センター宮崎観測所にて調査。

12 月 15 日：大学 ICT 推進協議会 2016 年度年次大会におけるポスター発表（五島ほか、京都大学研究資源アーカイブの概要：コンピュータや情報システムの利用など情報環境を中心に）。

2017 年 1 月 20 日：研究資源アーカイブ運営委員会専門委員会（第 6 回）開催。

2 月 21 日：沖縄県立芸術大学にて調査。

3 月：映像コンテンツ「マリア十五玄義図の探究」映像ステーション内での公開開始。

3 月 21 日：第 5 回研究資源アーカイブ研究会「教育研究のアーカイブ資料の保存・活用とその環境：情報・空間・運営」開催（ゲスト：阿児雄之 / 東京工

業大学博物館，山下俊介 / 北海道大学総合博物館）。



同日：『京都大学総合博物館ニュースレター』No. 39 に、「研究資源アーカイブ通信 河合雅雄資料：霊長類学関係，1959～1975」掲載。

3 月 24 日：総合博物館 1 階ロビーにピクチャーレールを設置。

3 月 30 日：研究資源アーカイブ運営委員会（第 13 回）開催（次年度事業検討，研究資源化プロジェクト 4 件新規採択）。

同日：「京都大学研究資源アーカイブデジタルコレクションガイド 2017」発行。

3 月 31 日：デジタルコレクション「京都大学防災研究所伊勢湾台風高潮被害調査資料，1959，2010。」「京都大学総合博物館文化史資料：沖縄関係ガラス乾板写真，1932。」一般公開。

平成 29 年度

2017 年 4 月 10 日：映像ステーションに，映像コンテンツ紹介パネル設置。



5 月 31 日～6 月 2 日：京都大学防災研究所地震予知研究センター宮崎観測所にて調査。

6 月 23 日：第 20 回大学博物館等協議会・第 12 回日本博物科学会にて口頭発表（永益，五島、京都大学研究資源アーカイブの活動・五島ほか、「京都大学デジタルアーカイブシステム」の概要と変遷）。

7 月 10 日：研究資源アーカイブ運営

委員会（第 14 回）開催。

7 月 31 日：MLA 交流会開催（附属図書館 2 名，大学文書館 4 名，総合博物館 6 名参加）。



7 月 31 日～8 月 4 日，21 日～25 日：学習院大学大学院アーカイブズ学専攻より実習生 1 名受け入れ。

7 月 31 日：『京都大学総合博物館ニュースレター』No. 40 に、「研究資源アーカイブ通信 アーカイブズと私 (1)：間瀬肇先生（防災研究所）に聞く」掲載。

7 月 31 日：『京大広報』No. 730 に「京都大学研究資源アーカイブが新たな資料を公開」掲載。

9 月 14 日：2018 年度実施分「研究資源化プロジェクト」説明相談会開催。フィールド科学教育研究センター横田盤技術専門職員による，研究資源化プロジェクト体験談紹介。



9 月 27 日：iPRES2017 総合博物館ツアー内で，映像ステーションにて研究資源アーカイブの活動紹介。事業説明後，オープンリールや試薬瓶などの資料実物の取扱い紹介，デジタルアーカイブシステム概要説明を行った。



（総合博物館 教務補佐員 西村由希子）

総合博物館日誌(平成29年7月～10月)

展示

▶平成29年度企画展

「標本からみる京都大学動物学のはじまり」

平成29年6月21日(水)～10月8日(日)

・博物館シンポジウム／7月2日(日)

Paul Callomon (ドレクセル大学)

Boris Krystufek (スロベニア自然博物館)

Kai He (総合博物館 日本学術振興会外国人特別研究員)

Daosavanh Sanamxay (ラオス国立大学)

本川雅治 (総合博物館)

中山直英 (総合博物館)

・展示解説／7月8日, 7月29日, 8月19日, 9月16日, 10月7日(土)

本川雅治 (総合博物館)

[関連講演会]

・「本草学から動物学へ」／7月15日(土)

疋田 努 (京都大学名誉教授)

・「三高動物学とこれからの博物館科学」／8月5日(土)

本川雅治 (総合博物館)

[ミニ連携展示]

・京都府立図書館／6月23日(水)～9月27日(日)

▶平成29年度特別展

「火焰型土器と西の縄文 Jomonese Japan 2017」

平成29年9月9日(土)～10月22日(日)

[特別対談／トーク&コンサート／9月9日(土)]

・特別対談「火焰型土器を語る」

小林達雄 (國學院大学名誉教授)

泉 拓良 (京都大学総合生存学館 特定教授)

・縄文コンサート

斎藤孝太郎 (エレキチェロ演奏者)

[ミュージアム・トーク]

・9月9日(土)

佐藤雅一 (新潟県津南町教育委員会)

・9月10日(日)

宮尾 亨 (新潟県立歴史博物館)

富井 真 (京都大学文化財総合研究センター)

・「火焰型土器の造形」／10月15日(日)

サイモン・ケイナー (セインズベリー日本藝術研究所)

宮尾 亨 (新潟県立歴史博物館)

[研究講演会]

・「火焰型土器と西の縄文」／9月10日(日)

寺崎裕助 (新潟県考古学会 会長)

泉 拓良 (京都大学総合生存学館 特定教授)

建石 徹 (文化庁美術学芸課)

[ワークショップ「考古学者の弟子」]

・シリーズ①「縄文土器ファンコース つくってみる」／9月16日(土)

妹尾裕介 (滋賀県立琵琶湖博物館)

・シリーズ②「縄文土器エキスパートコース くらべてみる」／10月7日(土)

泉 拓良 (京都大学総合生存学館 特定教授)

村上由美子 (総合博物館)

富井 真 (京都大学文化財総合研究センター)

進行: 塩瀬隆之 (総合博物館)

・シリーズ③「縄文土器マスターコース かんがえてみる」／10月14日(土)

泉 拓良 (京都大学総合生存学館 特定教授)

富井 真 (京都大学文化財総合研究センター)

[ロビー展示]

・「願いをこめた私の土偶」

／9月9日(土)～10月22日(日)

レクチャーシリーズ

・No. 146 「ムカデはなぜあれほど機敏に動けるのだろうか? : 多足ロボットを用いた実験的検証」／10月14日(土)

青井伸也 (京都大学工学研究科)

総合博物館セミナー

・第86回 「バルカン半島における生物多様性のパターンとプロセス: 哺乳類学者の視点」／7月14日(金)

Boris Krystufek (スロベニア自然史博物館脊椎動物部門 部門長 / 京都大学 客員教授)

・第87回 「火焰土器のつくり方」／10月13日(金)

宮尾 亨 (新潟県立歴史博物館)

イベント

・京都千年天文学街道 第29回 アストロトーク／7月29日(土)

講演: 梅本万規 (星のソムリエ / 京都千年天文学街道ガイド)

4次元宇宙シアター: 青木成一郎 (京都大学天文普及プロジェクト室 室長 / 京都情報大学院大学)

・夏休み学習教室 体験 EXPO2017 夏／8月2日(水)～8月4日(日)
[8月2日(水)]

〈No. 1〉深海魚カードで挑戦! アーキビストの仕事

齋藤 歩 (総合博物館)

中山直英 (総合博物館)

〈No. 2〉お能にチャレンジ! ~お能はミュージカル? ~

河村純子 (河村能舞台「能楽おもしろ講座」主宰)

[8月3日(木)]

〈No. 3〉黄鉄鉱を掘り出そう! ~結晶のふしぎな形~

高田雅介 (高田クリスタルミュージアム 館長)

白勢洋平 (総合博物館)

〈No. 4〉元素博士ジュニアになろう! ~えれめんトランプをしながら元素を知ろう~

桜井 弘 (京都薬科大学名誉教授, 元素周期表同好会)

[8月4日(金)]

〈No. 5〉トカゲとヘビはどこがちがう?

疋田 努 (京都大学名誉教授)

〈No. 6〉縄文時代にワープして一人ひとりが自分の「願いをこめた土偶」を作ろう!

山口 三佐子 (子ども縄文の会 代表, NPO 法人国際縄文学協会 会員)

〈No. 7〉望遠鏡を作って星や月を観察しよう + 大人のための学習教室「具体新書」

川上紳一 (岐阜聖徳学園大学教育学部)

大野照文 (三重県総合博物館 館長)

・高校生のための最先端レクチャー／8月9日(水)

木下豪太 (京都大学大学院農学研究科)

Kai He (総合博物館 日本学術振興会外国人特別研究員)

齊藤浩明 (京都大学大学院理学研究科)

・京都大学オープンキャンパス: 京都大学キャンパスライフ 夢を描く2日間

／8月9日(水)～8月10日(木)

・第6回京都・大学ミュージアム連携スタンプラリー／9月30日(土)～12月9日(土)

・京都千年天文学街道 第30回 アストロトーク／10月21日(土)

講演: 作花一志 (京都情報大学院大学)

4次元宇宙シアター: 青木成一郎 (京都大学天文普及プロジェクト室 室長 / 京都情報大学院大学)

入館者数

19,614名 (うち特別観覧: 66団体 2,712名)

発行日 2017年11月30日

編集・発行
〒606-8501

京都大学総合博物館
京都市左京区吉田本町

電話 075-753-3272
FAX 075-753-3277

<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>